

KOREA
2023

2023年 韓国建築見学実習

ライフキャリア特別セミナー I

参加学生

[3年]

畑 葵

畠山 ほのか

伊藤 雅

片田 夏海

小林 美月

明見 ひかる

中森 琴海

西谷 奈実

越智 こすず

沖本 菜月

[4年]

石塚 愛美

川岸 万純

宮本 真帆

佐々倉 七瀬

引率教職員

窪田 勝文

塚野 路哉

山下 遼

日程

8/22 (火)

広島駅集合

- > 新幹線にて博多駅へ
- > バスにて福岡国際空港へ
- > 空路：仁川国際空港へ
- > 専用車にて移動

名品館にて昼食 (石焼ビビンバ)

■ **リウム美術館 [Leeum, Samsung Museum of Art]**

■ **アモレパシフィック新社屋 [Amorepacific headquarters]**

ホテル (ホテル国都) チェックイン

中一会館明洞 2 号店にて夕食 (カルビ)

8/23 (水)

ホテルにて朝食

- > 専用車にて移動

■ **ミメシスアートミュージアム [Mimesis Art Museum]**

ナンギナンプデチゲにて昼食 (プテチゲ)

■ **ソウル大学校美術館 [Seoul National University Museum of Art]**

■ **DDP 東大門デザインプラザ見学 [Dongdaemun Design Plaza]**

周辺市街見学

ユガネダツカルビ明洞駅店にて夕食 (タツカルビ・焼飯)

ホテルにて振り返り学修

8/24 (木)

ホテルにて朝食

- > 専用車にて移動

高速道路サービスエリアにて昼食 (各自選択)

■ **サヤパーク [Saya Park Observatory, Saya Park Art Pavilion]**

高速道路サービスエリアにて夕食 (各自選択)

ホテルにて振り返り学修

8/25 (金)

ホテルにて朝食、チェックアウト

- > 専用車にて移動

■ **梨花女子大学校 [Ewha Womans University]**

明洞周辺でフリーショッピング、各自昼食

- > 空路：福岡国際空港へ

- > バスにて博多駅へ

- > 新幹線にて広島駅へ

広島駅着、解散

DAY 1

Leeum, Samsung Museum of Art

Jean Nouvel, Mario Botta, Rem Koolhaas
2004

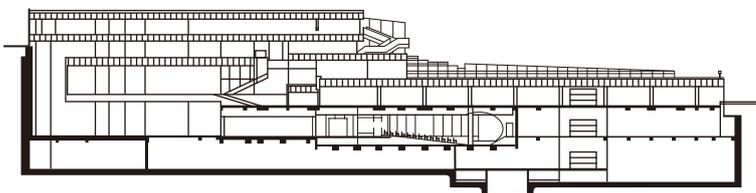
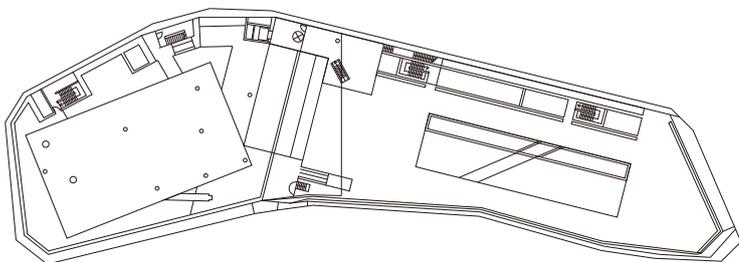
Location : Soul Korea

Project area : 2,333 m²

Site area : 2,333 m²

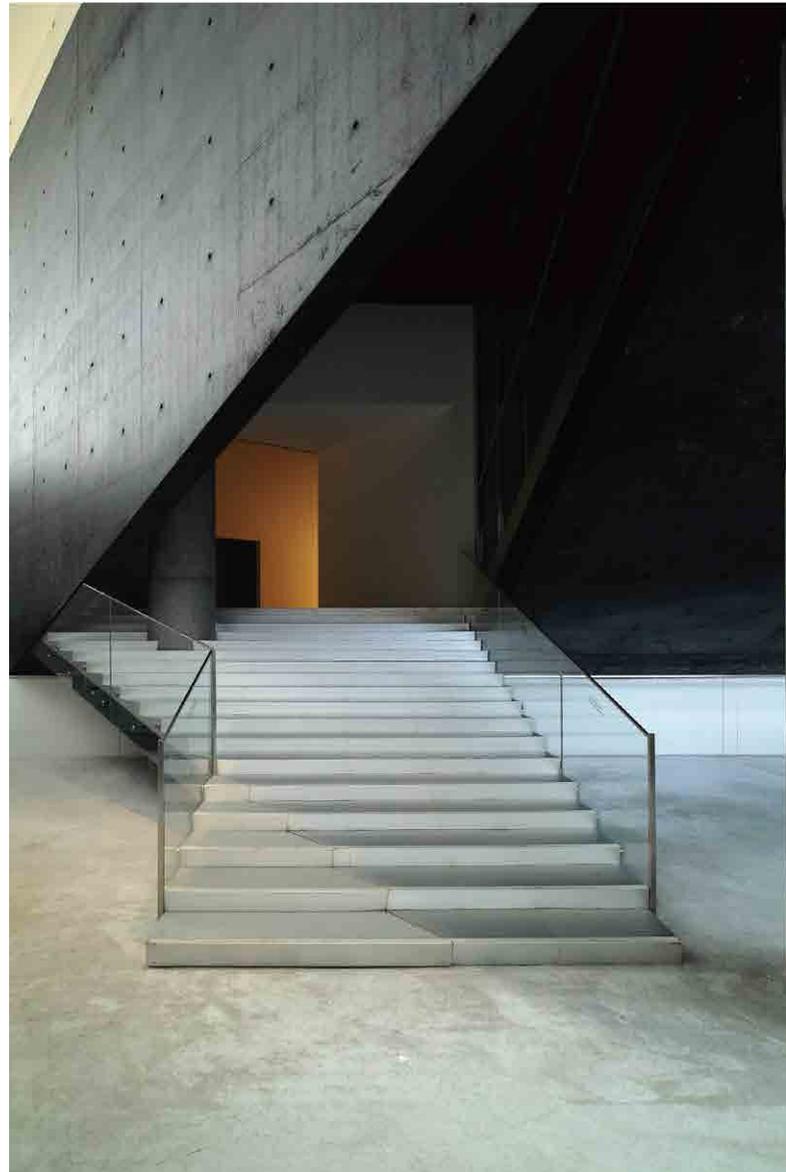
Floor area : 10,000 m²

Volume : 42,000 m³





Exterior





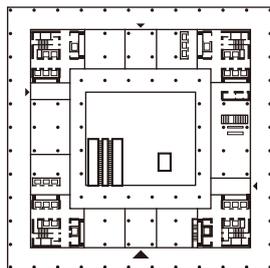
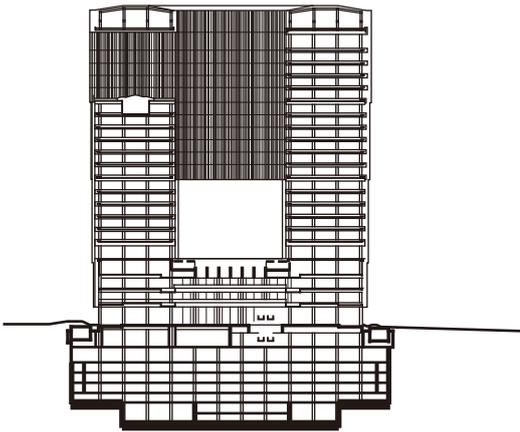


DAY 1

Amorepacific headquarters

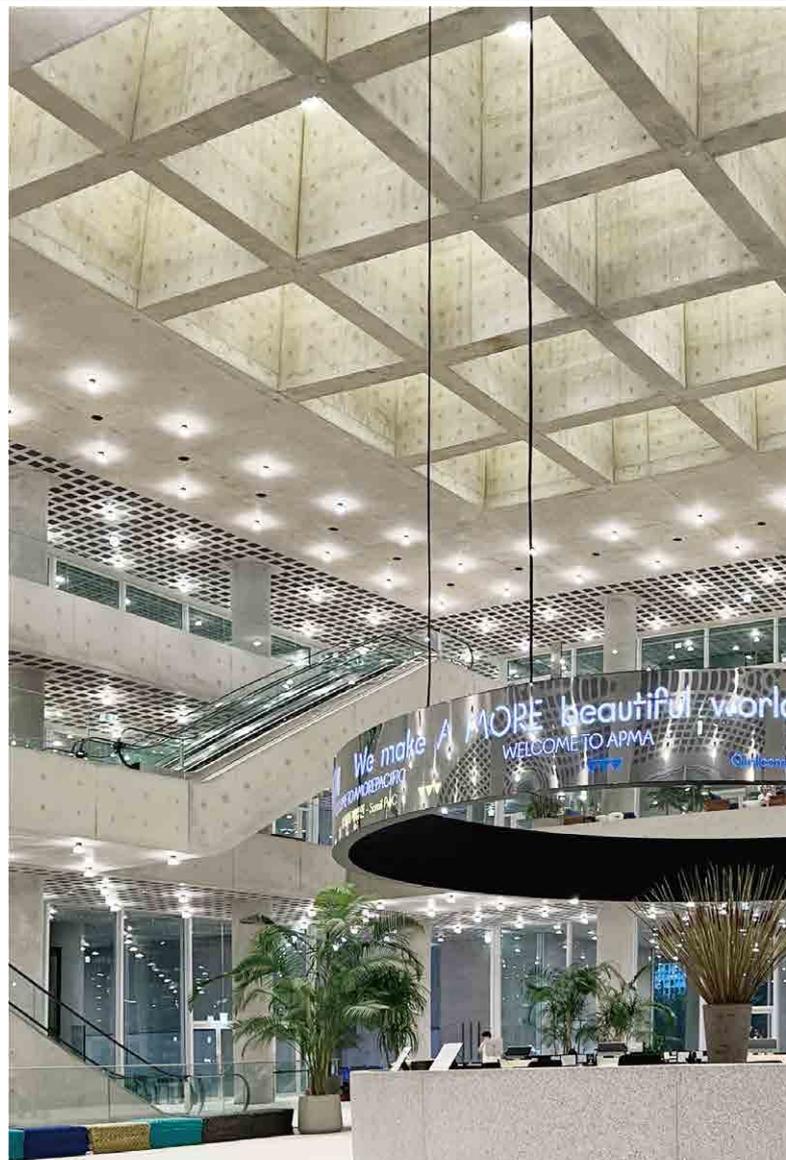
David Chipperfield Architects
2010

Location : Soul Korea
Project area : 14525.62 m²
Site area : 14525.62 m²
Floor area : 216,000 m²





Entrance



Entrance2





DAY 2

Mimesis Art Museum

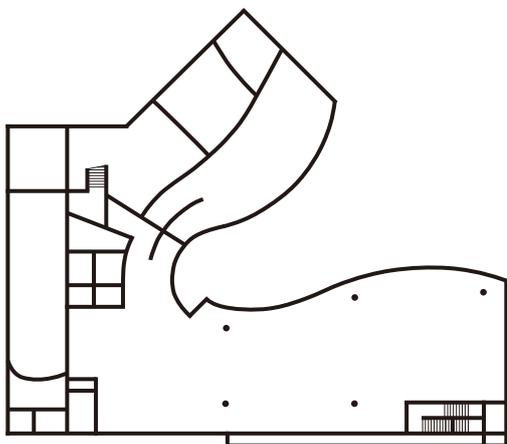
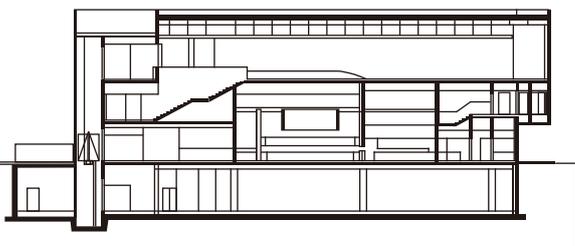
Álvaro Siza
2010

Location : Soul South Korea

Total area : 4,650 m²

Building area : 1,300 m²

Floor area : 4,000 m²





Exterior



Exhibition hall





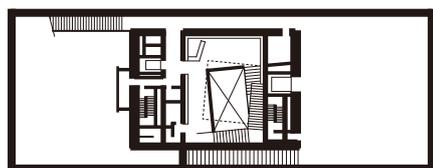
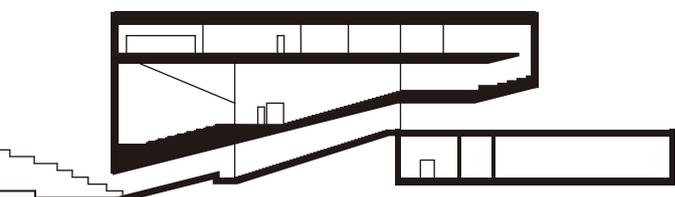
DAY 2

Seoul National University Museum of Art

OMA
2005

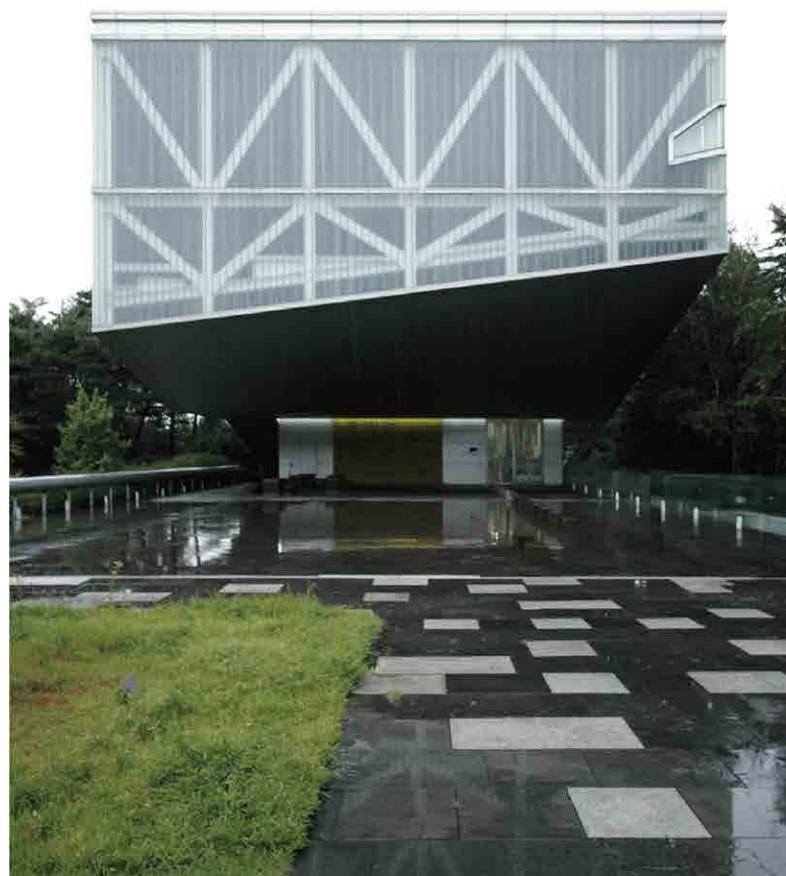
Location : Soul Korea

Floor area : 4,478 m²



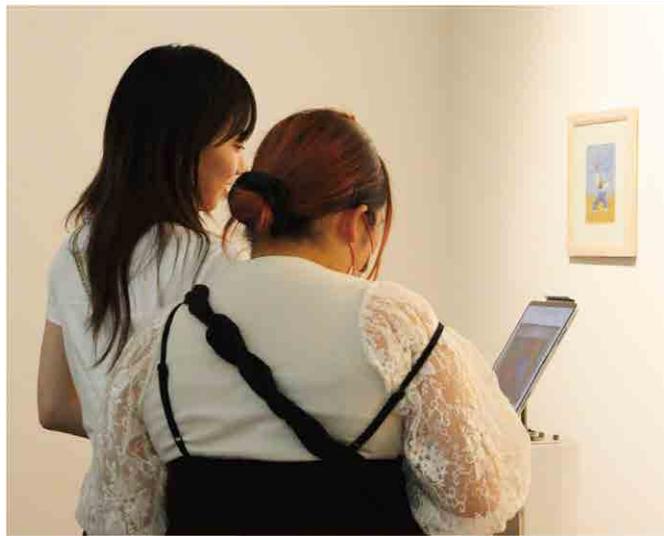


Entrance



Facade



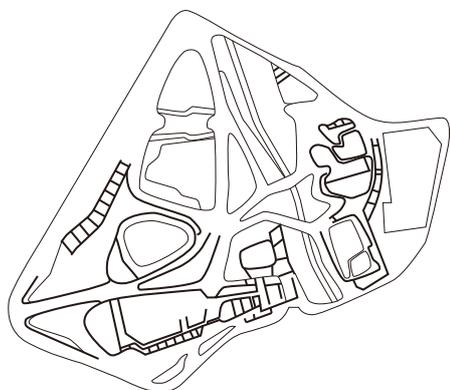


DAY 2

Dongdaemun Design Plaza

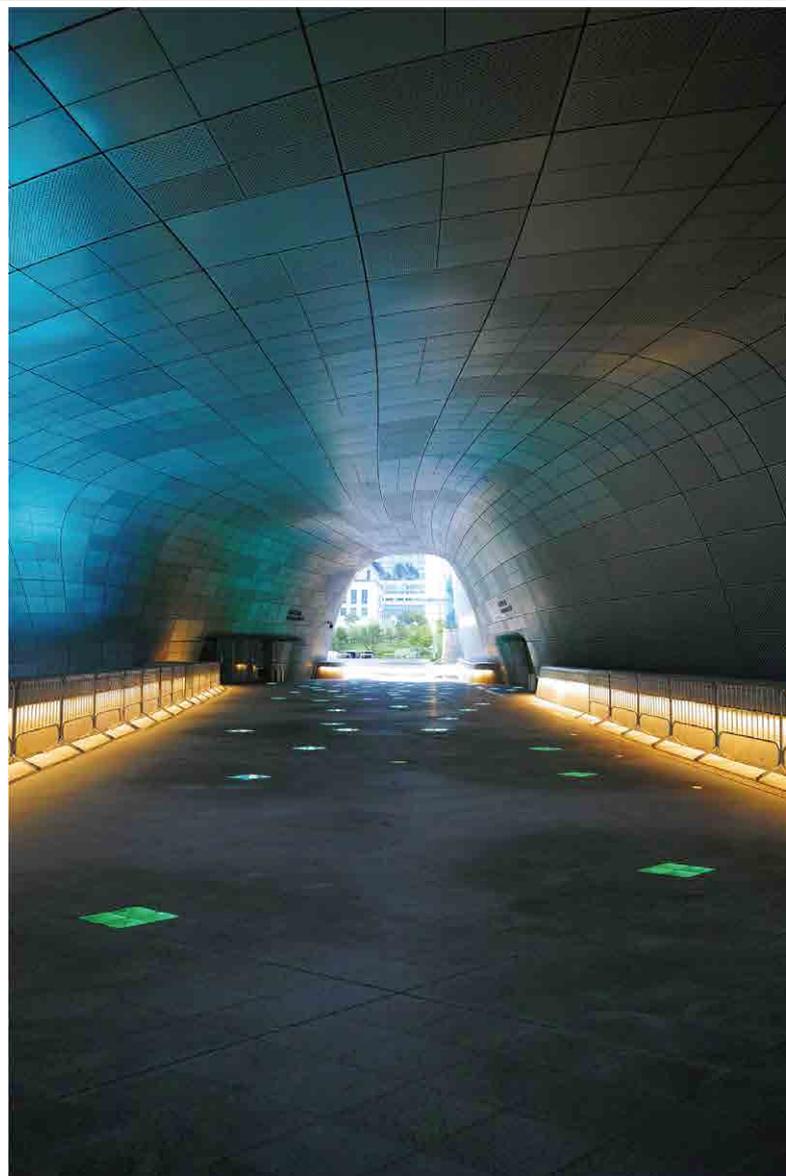
Zaha Hadid
2014

Location : Seoul Korea
Project area : 65,000 m²
Site area : 65,000 m²
Floor area : 85,320 m²
Park : 30,000 m²





Exterior



Passageway





DAY 3

Saya Park Observatory

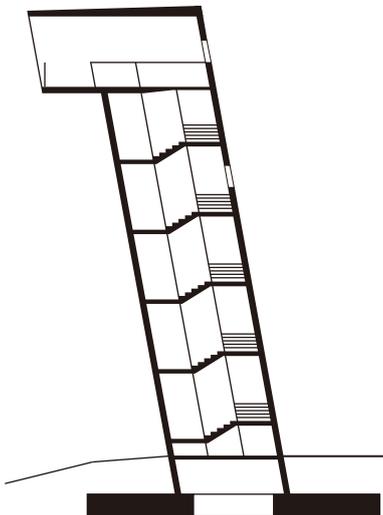
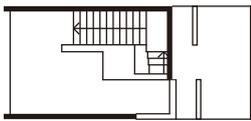
Álvaro Siza and Carlos Castanheira
2018

Location : Gyeongsangbuk-do Korea

Project area : 308,000 m²

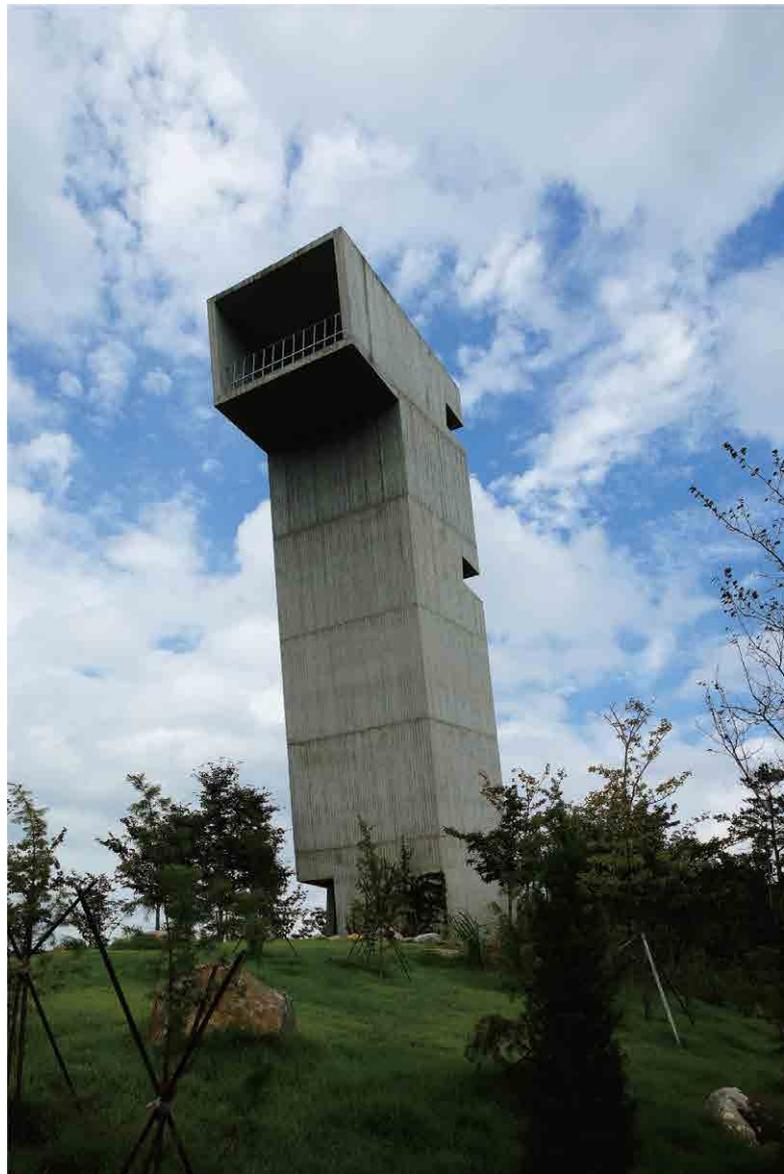
Art Pavilion : 1,350 m²

Observatory : 200 m²





Top Floor



Facade





DAY 3

Saya Park Art Pavilion

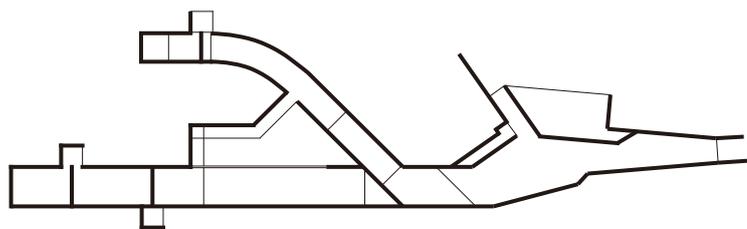
Álvaro Siza and Carlos Castanheira
2018

Location : Gyeongsangbuk-do Korea

Project area : 308,000 m²

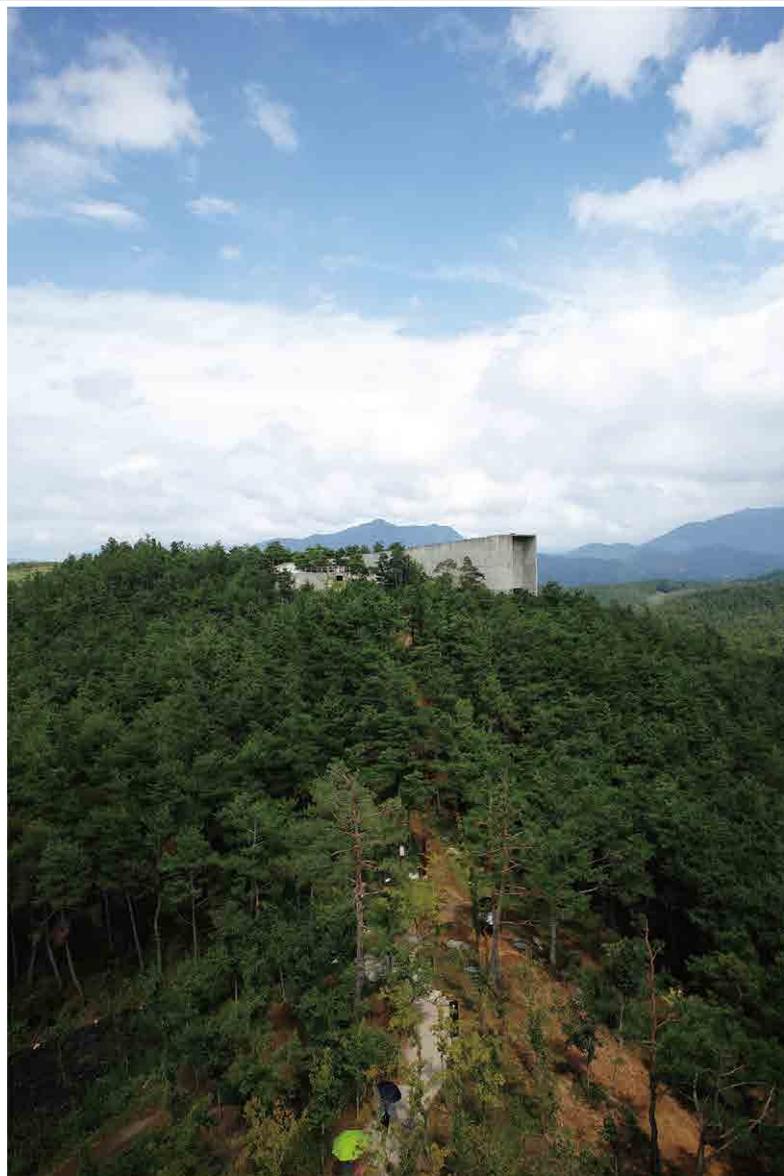
Art Pavilion : 1,350 m²

Observatory : 200 m²



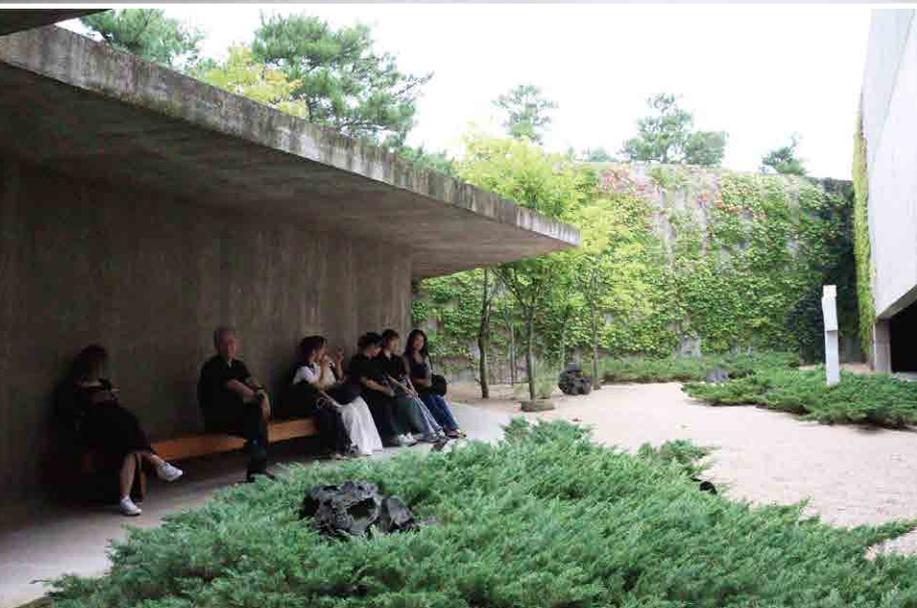


Courtyard



Exterior



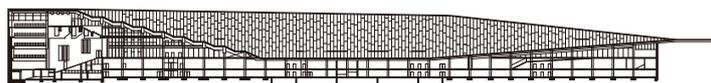
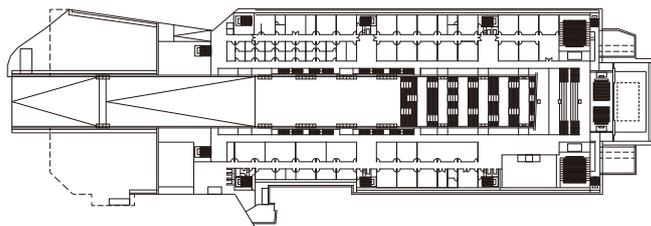


DAY 4

Ewha Womans University

Dominique Perrault
2008

Location : Soul Korea
Project area : 65,000 m²
Building area : 50,000 m²
Floor area : 70,000 m²
Landscape : 31,000 m²





Exterior Valley



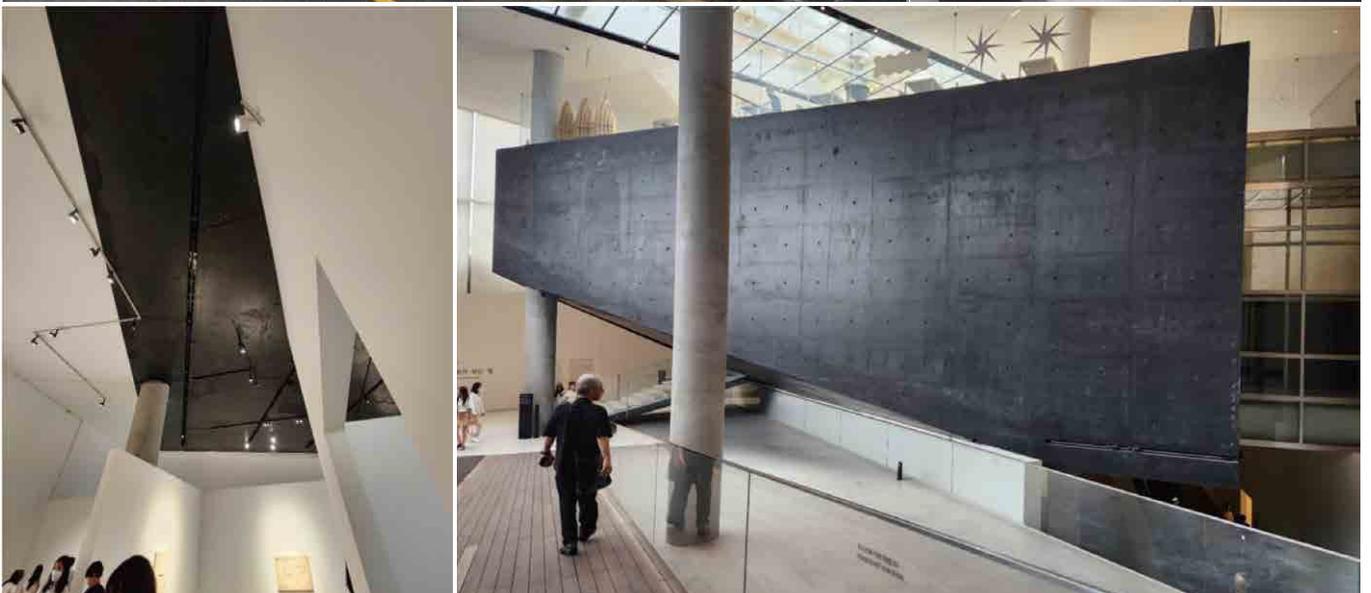
Curtain Wall





リウム美術館 (Leeum, Samsung Museum of Art)
Jean Nouvel, Mario Botta, Rem Koolhaas

川岸 万純



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

建物がある敷地は傾斜があり、住宅と商業が混じった場所であったが、周辺建物の高さは大体同じであった。対象建物も周辺建物の高さと同規模の高さで街と調和させている。道に沿って設計されているため、規模が大きいと圧迫感を与えてしまうが、高低差を使って駐車場の建物と美術館を分けることで、周囲の建物のスケールに近づけている。また、圧迫感を感じさせないように部分的にセットバックさせ、ガラス張りの上に厚みのあるコンクリートを配することで重力を感じさせないようにしている。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

カーブした道に沿って設計されており、建物の全貌が一度に見えるわけではないので、どんな建物に出会えるのかなと思った。目線の範囲はガラス張りになっているからなのか、圧迫感はほとんど感じる事がなかった。「建築」だけが奇抜ではないと感じた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

駐車場がある建物の GL の変化によって道を歩くにつれて、すーっと流れを感じた。アプローチ部分の上部に建物が突き出しており、近づくにつれて、建物をより大きく感じ、建築へ入るんだ、という気持ちが高まった。

F4. 至近距離で何を感じるか

アプローチ部分では空間の広がりを感じていたが、思ったより狭い空間だった。しかし、ガラス張りと公園の間なので圧迫感はない。さらに突き当りの空間は抜けており、奥にある植栽が見えるようになっていたので、地上の世界ではない地下の奥に連れていかれている感じを強く感じた。

F5. 内部と外部の関係性

外観からは中を想像できなかったが、中に入ると外からの連続性を強く感じた。アプローチ部分の折り返し部分が、展示空間へのアプローチとなっていたり、天井に配されている窓が外まで繋がっているところなどである。外観が内部の空間に影響しているのではなく、内部の空間が外観に滲んでいるような感覚を持った。

F6. シークエンスの展開

ブラックボックスがあることで空間が出来ているが、白い壁の置き方だけで空間を作っているのではなく、ブラックボックスと白い天井との境を跨ぐように照明のラインを配し、視覚的に空間を区切っている。床でも同じように、グレーチングをあえて壁に添わせずに配することで空間を区切っている。床と壁と天井それぞれで空間を区切ることでパキッと空間が変わることなく、連続していることを感じる。

F7. デティールが心に与える印象

質感での表現と空間の構成の両方でグラデーションのように空間を変えていると思った。100%真っ白の空間ではなく、抽象度の濃度を変えているような感覚である。展示の空間に入ると木のテクスチャーに注目いくが、進んでいくとコンクリートでできたブラックボックスに出会う。ブラックボックスはセパ穴がしっかり見える荒っぽさを感じる質感になっている。しかし、その空間ではブラックボックスより抽象度の高い円柱の柱や白い壁も存在している。進んでいるといつの間にか変わっていると感じさせることができる。

F8. 建築に使っている素材について

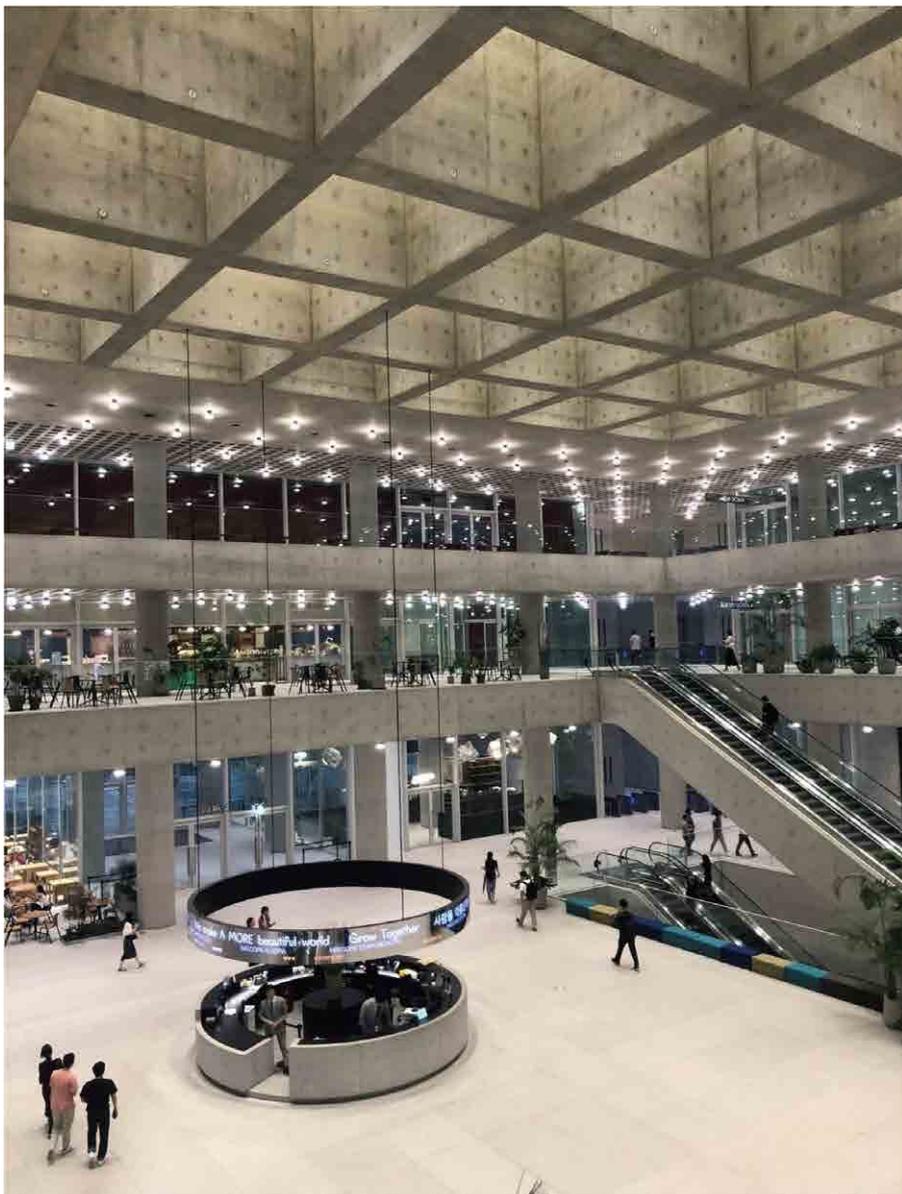
進んでいくにつれて素材や質感を変えている。アプローチ部分や入ってすぐのブラックボックスに出会う所では、テクスチャーを感じる木目が目を引いた。そこからコンクリートの質感を感じる空間、真っ白の壁や天井の空間である。素材や質感を抽象化されていることを感じた。

F9. 建築見学をしての感想

今まで見たことのない空間の仕切り方を体験したので、建築の中にいるときはどうなっているんだろう、おもしろいと思っていたらあつという間に終わってしまった。図面を見てこの空間を想像できないし、この空間にいるときに図面がどうなっているか分からなかった。自分の頭の中で理解が追い付かないぐらいアトラクションのような楽しさがあった。

アモレパシフィック新社屋 (Amorepacific headquarters)
Sir David Alan Chipperfield

西谷 奈実



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

周囲にある建物も、アモレパシフィック新社屋のように水平垂直でつくられているもののため、すっきりとその街並みに埋め込まれているように感じた。また目立つ突出がないため周囲の街並みの環境とうまく溶け込んでいた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから見たときは、周囲と溶け込みすぎていたこともあり面白くなさそうだと感じた。また周囲の建物がかかなり高く、それらに囲まれていた状況の方が印象に残っていたため、かなり小さく感じて心が動かされるような感動はなかった。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づくくと完全に心境は変わった。この建物は近づくるとかなりの大きさがあり威圧感があった。しかし嫌な感じはなく大きな物体ではあるが浮いているような軽さを感じた。そしてきれいにすっきりとまとまっているが穴が開いている箇所がありどんな空間が設けられているのだろうかに興味を持った。

F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離まで行き初めてブリーズソレイユが使われていることや、建物の周りに多くの木が植えられていることがわかった。周囲にはない自然で少し心にゆとりが生まれていくことを実感できた。また内部で過ごす人のことだけではなくブリーズソレイユを設けることでガラスからの反射を無くすように工夫しているのではないかと思った。周辺環境のことも考えられていると感じた。

F5. 内部と外部の関係性

外部では閉ざして内部の様子を見えないようにしている。また開口部が少なくブリーズソレイユを設けていることから内部は少し暗いのではないと考えさせられる。しかし内部に入ると想像よりもはるかに明るく広い空間が広がりまるで宝箱のようであると感じる。そして内部も外部も水平垂直できれいにまっすぐ水平に広がっていく空間に初めて心を動かされたような感覚になった。

F6. シークエンスの展開

内部空間へと入るとき天井が低くなる。そのことにより幅はそれほど狭いとは感じないが、かなり窮屈感を感じた。その先には外部からでは想像もできないほどの空間が広がることにより、かなりの解放感を感じることもできた。また明るさも含まれることでさらに心が解放される気分になった。

F7. デティールが心に与える印象

入ってすぐのエントランスをかなり広く設けてあることで、外部のすっきり感が繋がっているように感じ、心にも余裕が生まれて別世界にいるようだった。広すぎる空間は落ち着かないのではないかと思っていたが実際に体験することで考え方が全く変わった。

F8. 建築に使っている素材について

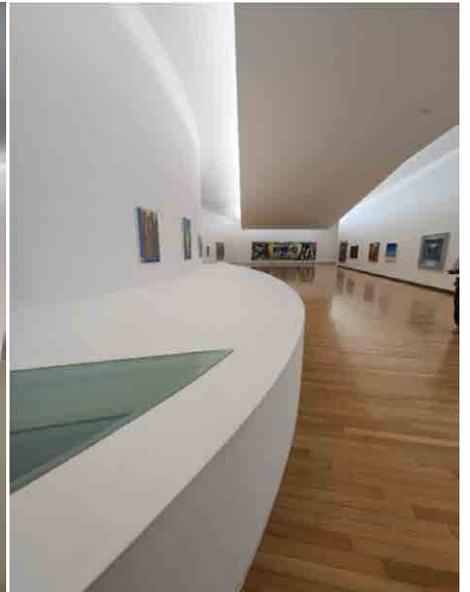
ブリーズソレイユを使うことで周囲のビルのようなカチツとした硬さがないと感じた。またそれを外部のすべてに使うことでより一体感を感じた。外部でブリーズソレイユを使い建物の水平垂直を和らげることで、内部に入ったときにより水平垂直を強く感じられると思った。

F9. 建築見学をしての感想

水平垂直はまとまりがあるからそのような建物が個人的に好きだった。そのためそのほかの魅力があまりよくわかっていなかった。しかし今回水平垂直の建物を見てまとまりだけではなく、スパンとまっすぐきれいに広がっていくことにとっても感動し心を動かされた。水平垂直はこんなにも心を動かすことができ面白いのだと実感することができた。

ミメシスアートミュージアム (Mimesis Art Museum)
Álvaro Siza

川岸 万純



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

ミメシス美術館は印刷会社が密集しているエリアにある。印刷会社は日本にはあまりないデザインの建物で、シザの建築はインパクトがあるが、ミメシス美術館が浮き過ぎない印象を持った。エリア全体の高さのボリュームは2～4階建てのもので構成されており、統一感を感じた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

道を曲がるとミメシス美術館が前方に見えてきた。曇り空だったため、建築と空が同じ色になっていた。しかし、何かわからないが何かある、そんな感覚を持った。遠くから見ると白い箱のような大きなボリュームが宙に浮いているような、あれはいったいなんだろう、そんな気持ちだった。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づいていくと、少しずつ建物と空の境がはっきりしてきて建物の形が分かるようになってきた。近づく、箱のようなボリュームは上に乗っているとわかった。この白い建築に近づいても、なんだこれはという気持ちは変わらなかった。迫力があるのに圧迫感はなく、軽さのようなものを感じた。

F4. 至近距離で何を感じるか

美術館の敷地に入っても、なんだこれはという気持ちはずっと変わらなかった。遠くで見ていた、箱のようなボリュームを近くで見ると大きさに圧倒された。軽さを感じるように、スリットが入っていることがわかった。先生が一人ずつ奥まで入ってみてほしいという空間では、なんとなくほわーんとした空気感を感じた。ほわーんとしているが、ぬるい感じというよりは少しすこーんと軽いものを感じた。雨だったことも関係しているのかもしれないが、ピリッとした空気はなく、気持ちが少しだけクリアになって軽くなる感じを受けた。ただ、すごく何かを感じたわけではなかった。

F5. 内部と外部の関係性

中に入るとこれが美術館なのか、今まで見てきたものとは違う建築だと感じた。雨や経年劣化の影響かわからないが、外観の白さとは少し違う感じがして、柔らかさを感じた。外部の造形性とはまた違った造形を感じたが、よく見ると室内でも外部と同じように湾曲している部分もあり、外部と内部の繋がりを感ずることもできた。しかし、室内の構成が複雑で自分が外観からみて今どこにいるのかあまり分からなかったのも、深い関係性は分からなかった。

F6. シークエンスの展開

内部に入ると今まで見たこともないような空間の切り方や壁の配置の連続だった。しかし、どんな構成になっているかわからないけど、不思議と自分が次に行くべき場所や行きたい場所がどんどん展開されており、「ここを見てみたい」、「この向こうはどうなっているんだろう」「何となくこっちに進んだ方がいい気がする」と思って進んでいたことを後から思い返してこれがシークエンスの展開なのかと思った。

F7. ディティールが心に与える印象

外部も内部も主に白を基調として作られていた。のべつとした重い印象にならないように天井や床の接地面をぴったりくっつけないようにしていた。また、造形的にも空間的にも面白い構成で作られているが、どこかに対比させるものがないと、途端に嘘っぽくなるのかなと思った。今回のシザの建築は床材に木目がしっかり出ている木を使っている。自然の素材を使うことで具象性が出て、白が持つ抽象性に対比させている。それによって今回は、見たことがない建築だったがどこかで地に足のついたような気持ちを持つことが出来、安心して見る事が出来たと思う。

F8. 建築に使っている素材について

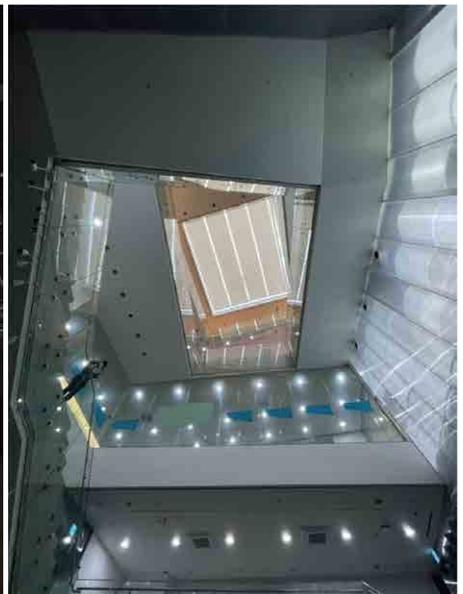
床材や階段には木を使っていたが、主に外部にも内部にもコンクリートが使われている。しかし、光の加減によって同じ白い壁にも陰影が出来ている。少ない素材で構成されているが、光の当て方によって何種類もの表情を作り出していることが分かった。

F9. 建築見学をしての感想

今まで見てきた建築とは違う、何なんだこれはという感想を見ていたときも帰ってからずっと持っていた。手法やテクニックなど言葉で表現することが出来ない何かをこの建築では感じる事が出来た。また、自分が持っている言語や建築の知識だけではまだ全てを感じる事が出来なかったと思うので、数年後、数十年後にまた訪れて、その時の自分が持つ感想を知りたいと思った。

ソウル大学美術館 (Seoul National University Museum of Art)
Rem Koolhaas

越智 こすず



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

建物はソウル大学の敷地内にあり、周辺に建物は少なくすっきりとしていた。そして緑も多く自然豊かな場所に建っていた。建築と周囲の関係性は、互いが互いの邪魔をすることなく自然の中に存在するこの建築の形が良さを惹き立てていた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから見た時、「んん？なんだ？この形状にこの浮遊感。どうなっているんだ？」という気持ちが私の遠くから確認したときの第一印象だった。この建築はどこまでが1階で何階建てなのかがすごく知りたくなっていた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づいていくと、建物の勾配と削り取られているような建築の形をしているものの迫力が、増して伝わっていく。遠くにいるよりも近くに来ると大迫力に変わり、建物の下に行くと、頭から圧力を感じ、感じるものがどんどん増えていく。

F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離ではかなりの圧迫感を感じていた。それと同時に、建物の奥へと屋根が続いていることに気づき、この先はどこに繋がっているのか、どのような動線計画となっているのかが深く知りたいと感じた。そして、思っていたよりかは屋根の下はそんなに暗くなかったことに驚いた。

F5. 内部と外部の関係性

外部から見ると内部の様子が一切見えず、閉鎖的なイメージを感じさせる。だが中に入ってみると、外部の景色が直接見えることはないが、外部からの採光のあたたかみを感じることができ、内部と外部の印象は対照的であると感じた。

F6. シークエンスの展開

ソウル大学美術館へは坂道を登ってアプローチしていく。そして見えてくるのは大きなオブジェと、ソウル大学美術館の建物だ。坂の斜面と同じような角度で切り取られたかようになっており、坂とは垂直方向へとも傾いていることがわかる。

F7. ディテールが心に与える印象

階ごとにかべの色が異なることや、床の形大きさが異なっていること、この二つによって階ごとの表情が異なり、私たちに話しかけてきているのではないかと思わせるようで、建物が生きているかのように感じ、面白かった。

F8. 建築に使っている素材について

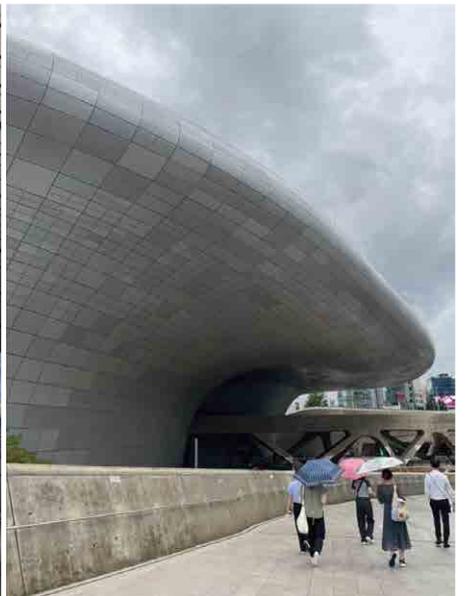
採光を取り入れる際の窓がガラスではなく、曇りガラスでもなく不思議な素材の物を使って採光を取り入れていた。そのことにより、採光が私たち来客に優しく微笑みかけてくれているように感じ、空の表情が伝わってくる。

F9. 建築見学をしての感想

美術品が飾られている内部に入ると意外と普通で面白味はなかったように感じた。階段を上る最中にあるアート作品の空間でもそんな面白みは感じなかったと思う。建築を見に来た人であればすばらしさに気づくことはできると思うが、作品を見に来た人は建築のすばらしさを理解できないのでは？と思った。外部からの印象と内部へ入ったときとは外部を見ているときのほうがわくわくしていた気がしていた。

DDP 東大門デザインプラザ (Dongdaemun Design Plaza)
Zaha Hadid

越智 こすず



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

周辺にはビルなどのオフィスや店が立ち並ぶ中に建築されていた。そのビルや店の形は水平垂直なよく見る現実的なものが多く存在する中、ザハの作品は曲線だらけの SF 映画に出てくるような非現実的なものが建ち、関係性は真逆とって良い気はする。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

「私の知っている建築物ではない、なんだ、これは。ここは本当に 3 次元なのか？」と感じた。宇宙船が止まっていて、今にも宇宙人が出てきそうな感覚で本当に信じられなかった。そして巨大な規模の建築で圧倒されていた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

遠くから見た時は、きれいな円を描く曲線であるように感じたが、近づいていくにつれ、その曲線はきれいな円を描く曲線ではなかったことに気づく。そして、その歪んだ部分が、雨雲が近づき、私たちに覆いかぶさってきたような気分させる。そんな感覚だった。

F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離では、建物の迫力と、力強さとをまず一番感じた。私たちが普段体験している建築物はこんなに屋根が私たちに覆いかぶさってくるような建築はなく、外にいて建物を下から見ても上は空で明るい。だが、ザハの作品は、上に曲線のキノコのような形態が覆いかぶさってきて大迫力でもあり、建物が生きているかのような力強さを感じた。

F5. 内部と外部の関係性

外部も内部もお互いがお互いに距離を置いているように感じた。外部から内部が見えるのは出入口のみでそれ以外は見えることはなく、内部から外部が見える部分も最上階のテラスに出ないと無い。内部も外部もお互いを遮断し、現実味をやはり感じさせないことから、関係は同じ関係にあると思う。

F6. シークエンスの展開

大きな道路を渡り、建築を見ていく。周辺には水平垂直のビルや店が多く立ち並ぶ中に急に現れてくる宇宙船のような曲線でできている建築。遠くから見ても私の目を惹き、圧倒的存在感を感じてくる。建物が今にもまた違う形で変形しそうな気持ちにさせた。

F7. デティールが心に与える印象

内部に入り、天井を見ると、白い天井には天井のゆがみに沿って黒い線が 2 本ある。この 2 本の線があることによって、天井の曲線やゆがみが強調され、私たち来客者に非現実的な建築であることを感じさせる。ここに黒の線がなければ、空間はぼやぼやとぼやけた曲線があまり感じない空間となっていただろう。

F8. 建築に使っている素材について

外壁に使用されているアルミのパネルをよく見ると、それぞれのパネルの大きさや、色が微妙に異なり、これにより建築物に生命を宿らせ、近代的な風格を私たちに与える。このパネルの質、艶感を感じ、この艶がまた生きているように感じさせてくるのだと思う。

F9. 建築見学をしての感想

私は、実習の課題でザハの作品を参考にし、設計をした。ザハの曲線の使い方や、その曲線の中に存在する直線はとても美しいもので、センスがないとやはり不可能で、ザハにしかできない表現で、とても圧倒された。私の課題では曲線も活かされることもなく、曲線であることの意味を感じられないような設計だったと気づいた。ザハはやはり圧倒的に曲線をうまく使用し、組み合わせる天才だと思った。

サヤパーク展望台 (Saya Park Observatory)
Álvaro Siza

沖本 菜月



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

サヤパークの展望台は、山を 15 分くらい登った場所で、山頂にある。周りは木が茂っていて、初めて見た時は、展望台という事も知らなかったの、なぜそこにあるのか、なぜこの形状なのかも全く分からなかった。周りの木々の中で存在感はあったが、悪目立ちはしていなかった。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから見ると細長く、地面に対して斜めに傾いた状態で建っているの、内部の様子が全く想像できなかった。また、壁が切り抜かれている様子が見えたが、中は暗かったので、予想もつかなかった。傾いていることが衝撃だった。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

展望台の周辺は、植栽がぎっちり考えられていて、展望台への道も綺麗にあったので、どんな内部なんだろうという気持ちが大きくなった。展望台を真下から見ても何もわからなかった。入口からは階段が見えたが、階段の先の想像はつかなかった。

F4. 至近距離で何を感じるか

階段を上っていくと、上に上がっているはずなのに、地下の階段を上っているかのような暗さで、照明は、足元と頭上に交互に設置されていて、階段は見える程度の明かりだった。どこまで続くのかも分からず、壁も斜めなので平衡感覚も薄れて、段々暗さに飲み込まれていくような感覚になった。

F5. 内部と外部の関係性

上がっていくと、急に光が差し込んできて、壁がくり抜かれ外の景色が見渡せる場所に出る。その時暗さに飲み込まれていたような感覚が一瞬で無くなって、景色の綺麗さと風をより感じられた。山の景色をより贅沢に感じられるような、暗い内部になっていたんだなと思った。

F6. シークエンスの展開

山の山頂から真っ暗な階段を上っていくと、ただ山を登っただけでは感じない、開放感とより綺麗に、鮮明に感じられる山の景色があったように思えた。暗く、先が分からない階段を上るのはとても不安な気持ちになり、そこから壮大な山の景色が見えるという開放感は、これ以上は無いのではないかなと思った。

F7. ディティールが心に与える印象

外壁が斜めになっているので、コンクリートも斜めに積まれていて、暗い螺旋階段を上っていると、真つすぐ何かが分からなくなって、外側の壁に吸い寄せられるようになる体験があった。また、コンクリートの無機質感が余計に不安さを引き立てるなと思った。

F8. 建築に使っている素材について

白いコンクリートが使われていた。地面に対して斜めに積まれているので、作る工程を見てみたいなと思った。また、最上階の天井のコンクリートのつなぎ目が葉の筋ようになっていたので、天井も斜めのコンクリートを使ったのかなと思った。

F9. 建築見学をしての感想

情報なしで行って本当に良かったと思った。こんな体験は一生できないような気がするの、貴重な経験だったなと思う。暗さと、不安さと、明るさと、開放感と、自然の壮大さを一気に体験でき、長時間の移動だったけど行って良かったと思った。

サヤパーク アートパビリオン (Saya Park Art Pavilion)
Álvaro Siza

石塚 愛美



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

山奥に建てられているため、周辺環境は一体が自然に囲まれていた。木々が生い茂る中にあるコンクリートの建物はその存在感を一際引き立てているようだった。風にそよぐ木々とは違い、微動だにしない建築を見るとその重みを感じる。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

周りの木々に建築本体が覆い隠されており、また規模が大きいため遠くから見ても建築の一部しか確認できなかった。しかし、木々の間から飛び出している部分は高く聳え立っていたが内部の様子を確認することができなかったため不気味さを感じた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づくと見えるのは二つの壁だった。それが見えた瞬間、他方向に散っていた意識が一気に引き寄せられ、音が消えるような感覚があった。それまで聞こえていた音は聞こえなくなり、全ての精神が静寂の世界に引き入れられたように感じた。

F4. 至近距離で何を感じるか

内部空間はほとんどが広く、天井高も高い場所ばかりだったのにも関わらずじわじわと何かが迫ってくるような圧迫感を感じた。空間は広くても薄暗いためか、不気味さも感じた。

F5. 内部と外部の関係性

かどに開けられた穴はごく一部しか外部を見せていないにも関わらず、サッシなどを利用していないことでよりその境界線を無くそうとしているように思えた。また、穴から見える自然によって内部空間の抽象性を増している。

F6. シークエンスの展開

天井高が高くても薄暗い空間にすることで反対に圧迫感を感じさせられる。それに加えて低めの壁を潜らせて次の大きな空間へ移動させることで、見た人の感じ方に変化を与える。また、廊下が緩やかなスロープになっているため、奥へ進めば進むほど空間に広がりを感じる。

F7. デティールが心に与える印象

各所の壁に人の身長と同じくらいの高さに一つブロックを取ったようなへこみがあった。それがどのような意味を持っているのかはわからなかったが、そのへこみから移動している人の動きを感じた。動きを感じさせることによってその先にはまだ空間があるということを予告しているように感じる。

F8. 建築に使っている素材について

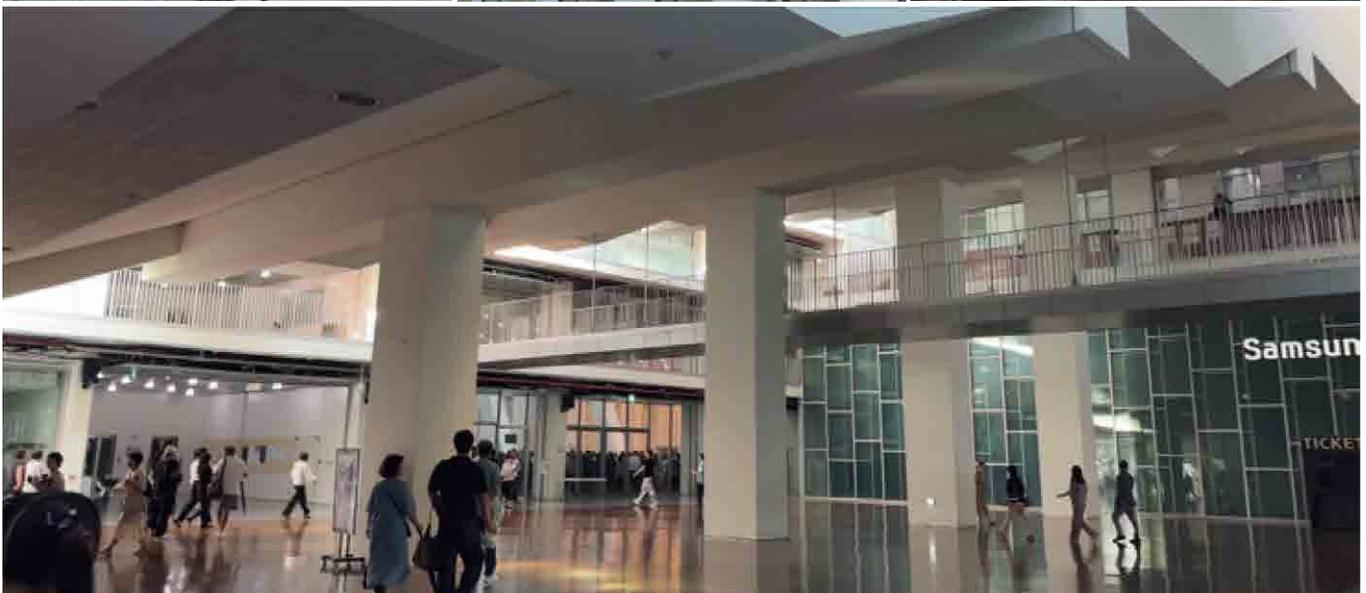
全ての素材がコンクリートで統一されていた。それは、外から採光した柔らかい光や鋭い光をわかりやすく映し出すためではないかと思った。また、素材を統一させることによって空間に漂う非日常的な雰囲気をさらに鮮明に感じられた。

F9. 建築見学をしての感想

これまでは空間構成についてや使っている素材や工法が特殊だという建築作品を見て感動してきた。しかし、本作品を見て初めて建築からメッセージを伝えられているような感覚を強く感じ取ることができた。それによって建築家と対話をしているような不思議な体験をすることができたと思う。

梨花女子大学校 (Ewha Womans University)
Dominique Perrault

石塚 愛美



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

梨花の街中にこの大学はある。大学内のキャンパスは歴史を感じる石造のような建物ばかりだった。そのため中央にあるペローが設計した作品は一際そのデザインが新鮮見えて、街中にある高層ビルを思い起こさせる。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

普段は地上の上に建築が建っているという固定概念で見てしまうため、この作品は地上ではなく地下へと潜っていく様子を見て新鮮味を感じた。遠くからでもガラスや鉄板に映り込む光が反射して美しく光っていた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

銀色に光る鉄板が美しく、キャンパス内で一箇所だけが異質な空気を放ち幻想的な風景に見えた。緩やかなスロープで下へ降っていくためどんどん建物に飲み込まれていくような不思議な感覚があった。

F4. 至近距離で何を感じるか

外に飛び出した鉄板とガラスに映り込む風景が違い、ファサードには異世界の光景が映し出されているような光景だった。大学のキャンパスは重々しく真面目であるべきだという固定概念が壊されるようだった。

F5. 内部と外部の関係性

谷側の壁面は全てガラスにも関わらず、内部は落ち着いた空間となっていた。光を内部に取り込みすぎず、しかし、外の風景をしっかりと見ることができた。ガラスは長方形のフレームで切り取られ、それが額縁のように外の風景を映し出していて、外とはまた違う幻想的な一面を見せているように感じた。

F6. シークエンスの展開

緩やかに降りるスロープと、反対側にある階段とは通る時の感覚が違ったように思う。スロープから降りるといつの間にか一番低いところに来ていた。反対に、階段から降りると一段一段が広く作られていたため時間をかけて降りていく。そのため、上から下へ下るときの景色の変化をより感じる事ができた。

F7. ディティールが心に与える印象

鉄板を繋ぐボルトを大胆にデザインの一部として使われていたことが印象的だった。やはりボルトが打たれた所というのは隠してしまいたい部分だと考えてしまうが、この作品ではそんなボルトでさえも建築を魅力的に見せる役割を果たせることを学んだ。

F8. 建築に使っている素材について

鉄板の表面がザラザラした素材ではなかった。反射性が高く少しでこぼこした表面にしていることによってメタリックで全体を近未来的なデザインに表現されていたように思う。鉄を使うのにも、表面の仕上げを変えることで見る人への印象を大きく変えることができるとわかった。

F9. 建築見学をしての感想

まるで高層ビルを地に埋めたような作品だった。使用されていた鉄板に映り込む空や雲がとても美しく日々の学生生活をより刺激的にしてくれるような建築となっていたと思う。大胆な造り方をするによって見る人を魅了するだけでなく考え方やアイデアにも刺激を与えてくれそうに感じた。









2023年 韓国建築見学実習

ライフキャリア特別セミナーI

編集：広島女学院大学 人間生活学部 生活デザイン学科 建築コース

表紙デザイン：Storm Graphics 嵐川真次

発行：2024年3月

本誌掲載の記事、イラスト、写真、ロゴ等の無断転載・複製を禁じます。

HIROSHIMA JOGAKUIN
UNIVERSITY

Human Life Studies
Department of Living Design
architect course

Overseas architectural
practice